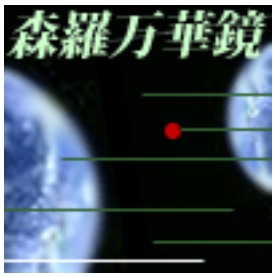
2010/02/01-14:00

【ムーサイト】歌手・涼恵に聞く
★歌と祈り、アニミズムの発信－涼恵の２０１０年 New



■新渡戸稲造とご先祖様
■神主と歌手
■ブルックスさんと「花の祈り」
■９・１１テロと阪神大震災
■自然に生かされて
■見直し聞き直しの時代

◇新渡戸稲造とご先祖様

－２０１０年にあたり、歌手の涼恵（すずえ）さんにお話をうかがいます。涼恵さんは「うましあしかび」と「このはなさくや」と２枚のアルバムを既に出されています。
涼恵さんはブラジルでお生まれになったそうですが、お父様の仕事の関係ですか。

涼恵　父は当時、商社に勤めていて、ブラジルに赴任していました。私は生まれてから２歳頃までブラジルに住んでいて、その後すぐに帰国しました。

－ブラジルのことは何か覚えていらっしゃいますか。

涼恵　記憶としてというよりも、２０歳の時に母とブラジルへ行った際にここ来たことあるとか、何を言っているか言葉が分かるというか、場所のにおいをかいだことがある気がしました。

－ブラジルはポルトガル語ですね。それは音として入ってくるのでしょうか。

涼恵　そうです。ポルトガル語はあいさつぐらいしか話せないのですが、音として入ってくるので覚えやすいです。

－お父様は日本に戻って神職になられたそうですが、それはなぜですか。

涼恵　私の先祖に新渡戸稲造がおり、稲造おじい様のお兄様（七郎氏）の代からの代々守っている神社があります。
新渡戸稲造はもともと稲之助という名前でした。新渡戸家は青森県の十和田市の三本木というところが出身です。地名の由来は、もともと三本の木しか生えないようだったところを、稲造おじい様の傳（つとう）おじい様が開拓をしたのです。奥入瀬川から稲生川という川を引いてきて、それがきっかけで稲が実るようになった年に初めて生まれた子どもだったので、稲造という名前が付けられました。
稲が実るようになったら、そこに守り神としてお稲荷さんを建てようということになり、ずっと守ってきたのです。しかし、代替りして私の祖父の代の時に、その稲荷を新渡戸家が見ていないということに気付き、誰も神職をやっていないのはご先祖様に申し訳ないから、今からでも遅くないので神職をうちの子孫から出していかなければならないのではないかという親族会議が行われ、その時に父が選ばれたのです。

先代の宮司さんの跡取りがいらっしゃらないということで、どなたかいい方がいらっしゃらないかと探していたところ、うちの父に話が回ってきまして、神戸に行くことを決意しました。
２歳でブラジルから帰ってきた時、最初は東京に戻りました。父もいきなり神戸に行くことが決まったのではなく、その神社が決まるまでの間、青森市の諏訪神社に奉職しており、私が小学校１年生の時に神戸に行きました。

◇神主と歌手

－その後は涼恵さんも神主さんの資格を取ったということですが。

涼恵　神職に就こうと考えたのは、純粋に父の手伝いをしたかったからです。巫女としては、小学生のころから姉と二人で手伝ってきましたが、１８歳の時に女性でも神主になれることを知りました。大宮の氷川神社で神職している従兄がうちの神社の手伝いに来た時に、神主の仕事は大変だから手伝える人がいるといい、と話したことがきっかけになりました。もともと私は神様のお側にいることがすごく好きだったのです。清々しくなるというか、心が落ち着くし、喜ぶのです。だったらもっと勉強をしてみたいと思いました。
歌うようになったのは、私がもともと歌が好きで、何だかうまく言えない感情が音楽になって、テープレコーダーに録音したりしていたこともありますが、母が「すずはそういうふうに表現をするのが好きだ。例えば、歌を歌うことやお芝居をすることは、空へ向かって上に伸びていく感じだけど、神主の勉強というのは、どちらかと言うと下に向かって根っ子を育むこと。根が育つと絶対に葉も育つから、すずにとって神主さんの勉強をするということは歌にとっても、表現することにとってもいい影響がある」と言われて、ものすごく勉強したいと思いました。

－お母様は巫女や神主というわけではないのですか。

涼恵　そういうわけではないのですが、感受性の鋭い人です。

－もともと歌い手にはなろうと思っていたのですか。

涼恵　なりたいとは思っていましたが、私はどちらかと言うとシャイだったので、表現をすることが好きなのに相手とかかわることが恐いという気持ちがありました。しかし歌手になりたいとかそういう次元ではなく、人間としての幹が太くなったというか「伝えたいこと」が明確になったので、その手段として私には歌があると思いました。

◇ブルックスさんと「花の祈り」

－歌手としてデビューしたのはいつですか。

涼恵　初めて発表した作品は２００２年の「うましあしかび」です。これまで出したＣＤは、アルバムが２枚とシングルが１枚です。そのほかにも限定でほかの方に楽曲を提供した曲を歌ったアルバムが２枚あります。

－２００２年は９・１１米同時多発テロの翌年ですね。

涼恵　「うましあしかび」を出したころ、ウィリアム・ブルックスさん（元・アメリカ大使館職員）と知り合いになりました。

　そのブルックスさんが「花の祈り」という曲に詞を付けてくれることとなったのは、「うましあしかび」を聴いて下さったある方が、「花の祈り」をとても気に入ってくださり、そこに英語の詞を付けることになったのがきっかけです。
　また、新渡戸稲造の『武士道』が英語で出版されていることもあり、周りの方から英語を使って作品を発表するということをやらなければいけないことだろうと言われ、アドバイスをしたからには適任を紹介するということで、お知り合いになりました。

　－「うましあしかび」の１０曲目に「花の祈り」が入っていて、「このはなさくや」の８曲目に「Prayer of the flowers」という曲として英語詞を付けているのがブルックスさんですね。

　涼恵　９・１１米同時多発テロのニュース画面を見ていて「今なら今ならまだ間に合うから」という言葉が出てきました。英語で言うと「Even now even now」です。そのため、曲を先に作って歌詞を載せたわけではないのです。
　イントロ部分は琴で、それからピアノです。「いーまーならー」と、声も１オクターブ半上がります。旋律がそうなのです。

　－歌い方も含め、今のいわゆるニューミュージック系の曲とは随分違う印象を受けました。しかし、すごく現代的には聴こえますが、こういう曲としてこのような歌い方をしているのかと思いました。

　涼恵　どうでしょうか。この曲に関しては、特に最初にいろいろ決めずに、本当に衝動のままにつくり、歌いました。歌っているときに、自分がただの媒体になって、何かの祈りかもしれないし、叫びかもしれないし、悲鳴かもしれない、何かよく分からないけれど、強い力で訴えかけるものがありました。

　－魂を鎮めるといった思いがあったのですか。

　涼恵　時にはそういう感情もあると思います。しかし私は「Prayer of the flowers」を歌うときに、一つの感情や何かを代表して表現するというよりは、空を見ている地球をイメージしました。そこから見える映像は、人が亡くなるビジョン（では）だけではなく、その場所に生えていた木や土や花、自然も同時に傷つけて命も奪うようなものでした。

　　◇９・１１テロと阪神大震災

　－歌うときに描くビジョンとしては、地球上で歌っているというよりも、地球の外から地球を見て歌っているという感じなのでしょうか。

　涼恵　外からではなく地球に包まれている感じはするので、内側から見ているビジョンです。

　－歌に込められているものはそれぞれ違うと思いますが、メッセージとしては何を発信しようとして歌っていますか。

　涼恵　命に対する感謝、奇跡などです。自然も自分も、生きとし生けるものすべては繋がっているので、自分だけではないエネルギーに突き動かされて歌い、曲を作ります。

　－９・１１米同時多発テロはどこで知りましたか。

涼恵　神戸にいるときにテレビで見ました。

－見た時はどのような感じでしたか。

涼恵　その前日に不思議な夢を見ました。すごくいろいろな光が煙と共に覆われて、その光は温かいというよりもサイレンのように切り裂き、破壊してしまうような鋭い光でした。すごく嫌な感じを持ったのは確かです。

－それは何かの予兆だったのでしょうかね。

涼恵　阪神・淡路大震災の時も同じような経験をしました。

－１９９５年1月１７日の阪神・淡路大震災の時はどういうものだったのですか。

涼恵　その時は夢だけではなく、前日に不思議な満月も見ました。ものすごく不思議な、無言の圧力がある満月でした。
翌日の１８日、１９日はうちの神社で、厄神祭という一番忙しいお祭りがあり、そのため、幟を神社の周りに立てるのです。でも、その日は風も強くないのに幟が何本か倒れていて、全部立て直しました。その時に空を見上げたら月がすごく近くて、これは何だと思いました。それは危険な感じのものというよりは、押し潰されるような感じの無言の圧力がありました。

－地震の時は家にいましたか。

涼恵　家にいました。本当に怖かったです。これほど自分が小さな生き物だと思いました。私は当時、姉と一つの部屋をタンスで区切っていたのですが、そのタンスが全部姉の方に倒れてしまいました。幸いにして私は無傷ですぐに動けたのですが、姉を助けに行こうとして、姉の顔以外全部にタンスが倒れている映像を見て、震えて動けなくなってしまいました。タンスがちょうど身体を空けていてくれていたように重なっていたので、姉は奇跡的に無傷でした。

－神社だから土地としては少し広かったと思われますが。

涼恵　そうです。家族は社務所にいましたが、うちの神社（小野八幡神社）以外の建物はすべてペシャンコになっていました。神社は神戸市の海側にあり、地盤が柔らかいのでほかのビルはすべて倒れていました。鳥居も倒れていましたが、家は何とか残っていました。

◇自然に生かされて

－震災の経験が自分の生き方や人生観に大きな影響を与えましたか。

涼恵　自然に生かされているという思いが強くなりました。それから人が土壇場で出る慈愛というか、性善説を強く信じるようになりました。
例えば、本当に知恵を分け合わないと明日生き残れないかもしれないとなった時に、パンが一つ残っているとします。そこで、その渦中にいる人たちは、そのパンを自分一人で食べてお腹いっぱいになって、今日一日生き残ってもどうしようもないので、何人かで分

け合って、皆で知恵を振り絞って、手を取り合って支え合って生き残ることが現実的な対策になるのです。人間は自分一人がお腹いっぱいになっても本当に何もできないことを悟ります。一人ではとても小さい存在なのです。
　それから、人間の儚さを悟りました。あの震災で人間がつくった建物は倒れてしまっていても、木はほとんど倒れていなかったのです。その木を見て「何てすごいのだろう」と何度と話し掛けたことか。私も震災を倒れずに生きた木のように、しなやかに根を張りたいと思いました。自然からの恵みがたくさんあることに大きな影響を受けました。

　－グラウンドゼロの跡地に行って、どのような印象を持ましたか。

　涼恵　２００６年の２月に行きました。今思えば、それも無言の圧力でした。訪れたのは昼間でしたが、すごく静かでした。すでに金網が張ってあり、鉄の十字架だけが印象に残りました。

　－「Prayer of the flowers」を歌ったのも同じ年ですか。

　涼恵　０６年の９月１１日にユニオンスクエアパークで行われたユニティーウォークのオープニングソングとして、ガンジー像の前で「Prayer of the flowers」を歌いました。その日の朝早くには、グラウンドゼロの目の前のセントポールズチャペルで平和の鐘を鳴らしました。いろいろな宗教、宗派の人が集まったのですが、その神道代表として出席させて頂きました。場所は教会が提供してくれて、イスラム教の方を含めどんな宗派の人も受け入れてくれました。

　◇見直し聞き直しの時代

　－カーネギーホールでも歌ったということですが。

　涼恵　０７年の１月に「Suzue Nitobe Recital　～ＫＯＴＯＤＡＭＡ～」としてやらせて頂きました。世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）とご縁があり、私も何か貢献したいと思いました。

　－今、国際的にはかなり激動の時代で、今までの秩序が新しい秩序に変わる転換期です。そういう世界情勢やご自身のこれまでの活動を踏まえて、今後は歌を通じて何を発信していきたいか、２０１０年の抱負をお聞かせください。

　涼恵　今年は「アニミズム」を発信していきたいです。私の音楽は、「ワールドミュージック」では何か少し違うし、「神道」と限定するのもまた違う。これは何だ、とよく言われていましたが、私の中で最近明確になってきたのが「アニミズム」です。それを今年は特に出していきたいです。
　アニミズムには、先祖崇拝という意味もありますが、精霊崇拝や目に見えない気配や存在、さらに目に見えるものに対しても、八百万の神と言って手を合わせるようなものがあると思います。英語の「animism」と、私が感覚で口を突いて出る「アニミズム」が完全に合致しているかと言うと、多少違う部分はあるのかもしれません。しかし分かりやすい言葉として一番に挙げられるのは「アニミズム」です。

　－涼恵さんのおっしゃる「アミニズム」とは生命の根源のようなものでしょうか。

　涼恵　そうです。 歌と祈りというのは、日本だとおおげさに思われてしまうけれど、実はすごく原始的なことなのではないかなと思います。

　－歌と祈りは根源的に一緒の根っ子にあったものかもしれませんね。

　涼恵　つき詰めるとそういう気がします。特に、２０１２年は古事記編纂１３００年、１３年は式年遷宮（正遷宮）だったり、社会的な背景での宗教感や神道感は強すぎたり、味付けが濃くなっていると言われているような、ちょうど時代的にも、見直し聞き直しが必要な時期に入っていると思います。
　それで１２年、１３年に真価を問うではないけれど、自分の目と足で見て、多分濃くなってくると思いますし、情報ももっと増えていると思うので、そこで皆が感じたものでまた何か生まれるものがあるかもしれません。あまりつくり過ぎない方がいいと思います。
　ただ能動的なものではあるので、教義、経典、教祖がいないものは発する側のセンスも大事だけど、感じ取る側にもセンスが必要だと思います。人によって、いかようにでも解釈ができてしまうものだからこそ危険な部分もあるし、利用される部分もあるかもしれません。しかし、本当はすごくピュアなものも同時にあります。私もそこはまだまだ勉強中でもっと勉強していきたいですし、教わりたいこともたくさんあります。

　－昨年はロシアにも行かれましたが。

　涼恵　芸術交流の一環で、ウラジオストク・ビエンナーレの開会式に参加しました。このような文化活動は今後も続けて行きたいです。
　私は「アニミズム」のような考え方が、現代の社会において必要とされていると思います。「アミニズム」は日本だと難しく考えられて、構えられてしまうこともありますが、海外ではニュートラルにとらえてくれることの方が多いです。そういう背景から言って、私が歌ってきた音楽は、間接的な形よりは、ライブで直接聴いて頂く機会を増やして反応も頂き、育てていきたいと思います。（聞き手＝解説委員　鈴木美勝／撮影＝写真部　小倉健史、インタビューは２００９年１２月２２日）

〔涼恵略歴〕

涼恵（すずえ）
本名・新渡戸涼恵。唄ひ手。小野八幡神社（兵庫／神戸）権祢宜。
１９７８年１月、ブラジル・サンパウロ生まれ。帰国後、東京、青森、神戸で育つ。カトリック系の高校卒業後、９７年、神職資格・直階を習得。２００１年により本格的に音楽活動を開始。０２年、権正階を修得。同年、初のＣＤアルバム『うましあしかび』を発表。０６年、渡米。世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）第８回世界大会、ソロコンサート Suzue Recital For the Benefit of WCRP “Kotodama”（０７年１月、ニューヨーク・カーネギーホール）、New York City 9/11 Unity Walk（ニューヨーク・ユニオンスクエアパーク）、移民１００周年コンサート（０８年、ブラジル）、英国の音楽プロデューサーとのコラボレーション、ウラジオストクビエンナーレ開会式（０９年、ロシア）など多岐にわたる活動を通して、世界的に高い評価を得ている。
主なＣＤアルバムに『うましあしかび』『さくら道』『このはなさくや』など。

涼恵ホームページ

▽ご意見、ご感想等はこちらまで▽
お問合せ

(C)時事通信社

閉じる